

## 動詞と形容詞の結合価変動と類似性

馬場崎, 聡美  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/26527>

---

出版情報 : 九州ドイツ文学. 26, pp.1-11, 2012-10-11. 九州大学独文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 動詞と形容詞の結合価変動と類似性

馬場崎 聡 美

## 1. 結合価保有語としての概念語

依存関係文法における概念語には動詞、名詞、形容詞、副詞という四つの下位区分がある。ここでは主に、別のシンタグマと結合する能力がある動詞と形容詞に焦点を合わせて考察を行う。<sup>1)</sup> 言語は原則的には相互的に情報伝達を行う社会活動の反映である。すなわち情報伝達によって生じる結果は言語体系を用いる能力、もしくは会話構成と会話認識を行う能力に基づく。結合価の問題では、聞き手や読み手の観点または識別する受け身の観点ではなく、言語の話し手や書き手または生産する能動的な観点が問題となる。<sup>2)</sup> その意味では、話し手と聞き手はそれぞれ異なった辞書を必要とする。聞き手は伝達情報を解読する過程において、内容を解明する辞書を用いる必要がある。それに対して、話し手は結合の可能性に関する辞書、類義語辞典、ある特別な分野に関する辞典を必要とするのだ。

## 2. 動詞と文枝の位置規定

言語の構成単位がお互いに結合するとき、動詞は文の構造的な中核としての役割を果たす。この統語論上の構成はまず文法的な手段によって形成され、そして語彙素は自己の意味自体に基づき、このような文構造の組み立てに関して明確な必要条件を持ち合わせている。<sup>3)</sup> 結合価の階層関係<sup>4)</sup>は定動詞または述語が一番上位にあることを示す。なぜならば定動詞が文構造に必要な要素を自らの周りに要求するからである。その階層の二段階目に動詞の不定形、名詞、形容詞がある。ここでは文が作られるのではないが、これらは動詞的、名詞的句構造の中核（文枝核）となる。第二段階目に属する結合価保有語は同時に、一番上位に位置する定動詞と述語の補足語でもある。三段階目はまた動詞の不定形、名詞、述語内容詞と付加語としての形容詞（分枝構成部）を包括する。

多数の動詞の異なった統語的關係は、他動性と自動性だけに基づいて説明するべきではない。結合価保有語の補足語における格支配についてはすでに概念があった。〔中略〕そして、特定の格支配によって埋められる個々別の品詞が設ける空位には、特徴が備わっているということも認識されていた。<sup>5)</sup>

### 3. 表層構造における結合価

結合価はどの単語が実際の発話行為、コミュニケーションの中で使われるかということに関連がある。これは構造分析を扱う問題であり、その理由は言語の統語論上の説明は言語の表層構造に限られているからである。その際に変形によって起こる、または深層構造と表層構造の識別標識を持っている任意的補足語に焦点があてられる。<sup>6)</sup>

#### 任意的補足語

聞き手にとって既知であるために、不必要な補足語はしばしば欠けることがある。このような状況では発話の内容が全く変わらないので、その除去された部分は聞き手によって難なく推定される。動詞から要求される共演成分 (Mitspieler) は削除変形 (Tilgungstransformation) を通じて表層構造から消えるが、それらの文は文法的に正しいままである。しかし以下のそれぞれの例文には全く異なったやり方で前置格目的語と 4 格目的語を補うことが可能である。

- 1) Er steht am Fenster. 彼は窓の側に立っている。 → Er steht. 彼は立っている。
- 2) Die Katze wirft Junge. 猫が子供を産む。 → Die Katze wirft. 猫が子供を産む。

記号とその意味の間に成立する関係は任意的補足語の除去の原因となるわけではない。例 1) のような現象は実際の発話場面でしか起こらない。なぜならば、その全体的な意味は言語上の脈絡と同様、発話状況の脈絡から結果として生じるからである。<sup>7)</sup> この空いている位置に現れるものは、つまり完全に前後の文脈に左右される。副詞の規定である am Fenster は他の状況語、例えば neben einem Mädchen, bei der Tür などに置き換えることができる。<sup>8)</sup> 例 1) とは対照的に、例 2) ではただ一つの 4 格目的語しか挿入可能ではない。言い換えれば、その文の意味は前後の脈絡ではなく、単純に語彙的な脈絡 (文の主語) に依存している。主語 die Katze と動詞 werfen のこの組み合わせは一つの転義の意味を明白に示す。哺乳類が主語の位置に並べられる場合に限って、動詞の werfen は「動物が子供を産む」Junge gebären と意味上では同等となり得る。この省略語法 (lexikalisierte Ellipse) は完全な文と削減された文の間に完璧な意味の同一が存在する特殊ケースであり<sup>9)</sup>、4 格目的語の節約にも関わらず結合価は二価のままである。

また、省略において方向の規定語や行動の内容についてもここでは議論の価値がある。この点において、比較的稀なコミュニケーション場面で目的語を必要としない動詞の情報価値だけが重要となる。例えば、Er ist gefahren という文は単純に移動の仕方について情報を提供しているに過ぎない。仮に essen という動詞の目的語の部分が空の状態では保たれているとすると、その動詞の意味には「ある特定の事柄にいそしむ」というふうな内容が含まれる。そのことから Er isst という文はただ「食事をする」という出来事を述べているという結論が出る。もしその文に 4 格目的語を一つ挿入するとするならば、Er isst ein Stück

Kuchen 「ある食物（ケーキ）を平らげる」という別の意味になる。

#### 4. 意味的結合価

結合価保有語は特定の意味特徴を持つコンテキストパートナーを要求する、言い換えれば結合価保有語の組み合わせの可能性は部分的にかなり限定されている。概念語の結合価は空位を設定し、結合価保有語のある語彙上の性質によって補足成分の配置は操作される。チョムスキーの選択規則を手掛かりとした意味的結合価の説明では、選択規則は統語的制限そのものに関係するのではなく、ある意味的結合価の統語上の反映として考察され、動詞と共演成分の意味成分 (Semen, Noemen, Bedeutungsmerkmalen u.a.) の適合から意味的結合価が結果として生じるということである。<sup>10)</sup> 選択は辞書に関する問題である。例えば、Der Junge fällt in den Graben という叙述文の動詞は、schnelle / unwillkürliche / nach unten gerichtete / Bewegung<sup>11)</sup> といった幾つかの意味成分を含む。

また、任意の添加語は動詞や形容詞と結合しないが、細かい情報を付け加える役割があり、もしそれが無制限に文に付け加えられたり文から省かれたりするなら、動詞の意味素性と相容れない場合があるので、添加語の用法に制限が加えられる。<sup>12)</sup>

- 1) Er macht Mittagschlaf jeden Tag auf dem Autobahn.\*

彼は毎日アウトバーンで昼寝をする。

- 2) Er wurde selten geboren.\*

彼は稀に生まれる。

例 1) の叙述文の動詞 *Mittagschlaf machen* には継続相が備わっている。この動詞は継続時間の境界がない状態を表し、この動詞の意味は所の添加語 *auf dem Autobahn* を文中から削除する。例 2) の場合では頻度を表す状況添加語は除去されるべきであり、その理由は動詞の意味特徴が瞬間的で一回限りの出来事だからである。

論理的そして意味的結合価において、ここまでの前提条件は具体的な意味を持つ文の構成だけに関係していた。これらの前提条件は転義のまたは慣用語法の使い方において満たされていない。多数の動詞には具体的、同時に比喩的であり得る複数の意味が含まれている。動詞の *donnern* の一つには、„sich mit donnerähnlichem Geräusch fort-, irgendwohin bewegen (ist)“<sup>13)</sup> という意味があり、その場合には動詞は生物ではなく、生命を持たない具象名詞を主語に置くことを前提条件とする。通例は方向の添加語としての機能を果たす一つの任意的状況語が見られる (Der Zug donnert über die Brücke. 列車が轟音をたてて橋を通過する / eine Lawine war zu Tal gedonnert. 雪崩は轟音をたてて崩れ落ちた)。しかし、動詞に転義の意味がある場合は、„laut schimpfen (hat)“<sup>14)</sup> という意味になり、主語の位置には人間を表すカテゴリーから選ばれた名詞が入る。例えば、Er donnerte furchtbar (彼はものすごく怒鳴った) という叙述文には義務的補足語は Er しかなく、主語の人物がどれほどや

かましく、激しく叫んでいるかを描写する状況添加語の *furchtbar* が現れている。

もし実際の発話場面で無意味な発話が登場するなら、それには三つの理由がある。Der Wasserturm schläft (給水塔が眠っている) という例文を使って、話し手が聞き手にどの意味を知らせたいのかということについて以下のような解説がある。<sup>15)</sup> 話し手はこの時に、「給水塔」が一つの生物であるということをあらかじめ假定もしくは主張する。全ての三つのケースにおいて、意味は文脈 (Ko-Text und Situation) に依存する。

- 1) メルヘンまたは夢に関係する話の場合がある。すなわち、発話場面を含めて生じているコンテキストは、「給水塔が眠っている」という文がどのように逸脱しているかという状況を描写する。聞き手の意見では、話し手は意味のある文を述べているということになる。
- 2) また、「給水塔が眠っている」という文を隠喩的に解釈しているという可能性もある。
- 3) 言語上の逸脱が問題となる可能性がある。例えば、話し手が「給水塔」という単語の意味を知らないので、話し手が「給水塔が眠っている」という文を作る場合がある。[中略] もし結合価保有語の意味が解るのであれば、発話場面や背景に関する情報に応じて可能なヴァレンツ・パートナーを選ぶことができる。ゆえに、ここではむしろ結合価における語用論上の観点が問題となる。

## 5. 形容詞の派生とその結合価

動詞は経過を表すが、形容詞では事物 (主語) または進行 (動詞) によってさらに詳しく規定される特徴がテーマとなる。厳密に言えば、形容詞に付随する特徴は、事物、人物、進行、関連などを述べる。<sup>16)</sup> 次の二つの例文 (Das Mädchen ist schön この少女は美しい / Die Frau singt schön この女性は歌がうまい) では、schön という性質が主語 das Mädchen と、また動詞 singen に属性があるとされる。すなわちこの主語とこの動詞は形容詞によってより明確に規定されている。

形容詞にも動詞と全く同じように義務的そして任意的パートナーがあり、さらに概念が備わっていない任意の添加語が付け加わる。形容詞の結合価の規定は叙述とそれから導き出された文意味論に依拠する。<sup>17)</sup> 補足語の数と格は語形、例えば danken-dankbar、によって変動する。動詞 danken は特定の形態を持つ次の共演成分、主語、3格目的語、前置詞グループ (für) を伴う一方、形容詞は3格目的語と一つの前置詞グループ (für) を条件として要求する。この同じ語根 {dank} を共有する形容詞は、全体として動詞の基礎構造に由来する内容が与えられている。形容詞グループは動詞グループの変容と言えよう。空位の数に結合価保有語の意味に依存するゆえに、品詞の種類はその際に根本的に重要であり得る。<sup>18)</sup>

表層構造では補足語の間に階層関係があり、それは、文成分の格によって規定される。個々の格の結合は統語的に動機づけられている。<sup>19)</sup> 動詞の場合、主語は人や事物をあらわし、文法的一致によって最も密接な構造上の結合を示す。第二位には4格目的語があり、3格と2格は統語的に出現する頻度は高くない。

- 1) 動詞 (2格支配) : Ich gedenke gern meiner Freunde in der Ferne.  
私は遠くにいる友達のことをよく思い出す。
- 2) 動詞 (4格と2格支配) : Ich habe ihn meines Beistandes versichert.  
私は彼に助力を約束する。
- 3) 形容詞 (2格支配) : Er ist des Lobes würdig. 古い用法  
彼は賞讃に値する。
- 4) 形容詞 (4格支配) : Er ist das Lob würdig. 話し言葉  
彼は賞讃に値する。

動詞が2格を支配することはまれであり、2格が使われることはそもそも実際の発話場面では少ない。中には2格と4格を同時に支配する動詞もあるが、この組み合わせの使用はそれほど珍しくはない。形容詞の補足成分の階層関係は、動詞とほぼ正反対のように思われる。3格と前置詞格補足語が4格よりも多くみられ、また2格の支配もまれではない。2格を支配する形容詞の中で、古い用法だとされるものが幾つかあり、それらは話し言葉において別の目的語にとって代わられるのが通常だとされている。

## 6. 形容詞の意味と結合価

多価の形容詞の補足成分は意味的にも統語的にも結合価保有語によって決められている。第一に、意味論の面 (lexikalisch-semanticke Ebene) から見た語群について議論されるべきである。<sup>20)</sup> 名詞グループ ‚die gegenüber fremden Meinungen tolerante Frau‘ (他人の意見に関して寛容な女性) では中核名詞 ‚Frau‘ があり、付加語的用法の形容詞グループは ‚gegenüber fremden Meinungen tolerant‘ である。これらの統語的構成は、現実世界で相互関係にある構成要素または事物に基づく。<sup>21)</sup> 結合価はまた話し手によって左右される主観的な構成要素にも基づいている。それらの構成要素は次のようなものである。聞き手の注意を引く場合または強調 (Lenkung der Aufmerksamkeit bzw. Hervorhebung)、感情移入または喜怒哀楽の表現 (die emotionale Beteiligung bzw. Ausdruck von Freude, Zorn, etc.)、態度表明 (die Stellungnahme zum Geltungsgrad)、個人的な見方 (die subjektive Sehweise [agenszugewandt, agensabgewandt])。<sup>22)</sup>

結合価保有語である形容詞は動詞に対して根本的な相違を持つ。動詞の結合価は文を構成するのに対して、名詞的品詞は文成分を組み立てる。動詞は文肢または補足語をパートナーとして要求し、名詞的品詞のパートナーは文肢構成部 (付加語) である。形容詞の結

合価についてはまた動詞の結合価との類似点もここで指摘しておこう。多数の結合価保有語である形容詞には幾つかの意味があり、そして複数の意味を持ち合わせるために、量的結合価と質的結合価の点に関して共演成分の変動が生じる。<sup>23)</sup> ここで *fremd* を使って収録資料<sup>24)</sup>にある形容詞の結合価について述べたいと思う。

- 1) *fremd* = ‚*einem anderen gehörend*‘ 他人の、異国の  
 Wertigkeit: Nullwertig 結合価: 零価  
 Syntaktische Verwendungsweise: Attribut (das fremde Auto) 付加語的用法
- 2) *fremd* = ‚*nicht bekannt*‘ 未知の、なじみのない  
 Wertigkeit: Einwertig 結合価: 一価  
 Syntaktische Verwendungsweise: Attribut (der mir fremde Mann) 付加語的用法  
 Prädikativ (Der Mann ist mir fremd.) 述語的用法  
 Adverbial (Er sah mir fremd aus.) 副詞的用法

例2)の形容詞の意味の場合、受益格 *mir* が意味のある文を作るために必須である。もし一つの共演成分が任意的に登場するならば(例えば、‚*Er ist über den Lärm ärgerlich*‘ 彼は騒音に対して腹を立てている。/ ‚*Er ist ärgerlich*‘ 彼は腹を立てている。)著しい意味の差異はない。

このほかに動詞との違いにおいて、*ähnlich*, *einig*, *identisch* などの比較の形容詞の量的結合価の変動がある。義務的補足成分の数の減少である。これは形容詞が持つ補足成分が主語に吸収されることによって起こる。

例: *einig*

- 1) Er ist endlich mit seinem Freund darüber *einig*. (2つの前置詞格目的語の支配)  
 彼はついにそのことについて友達と意見が一致した。
- 2) Sie sind endlich darüber *einig*. (1つの前置詞格目的語の支配)  
 彼らはついにそのことについて意見が一致した。

述語的機能で表されているこの形容詞は二つの補足成分を根本的に支配する。しかし、上の例2)の文にあるように、*mit seinem Freund* が要約されて主語と一緒にになり、補足成分が一つ残され、*einig* の量的結合価は一価に変わる。

## 7. 形容詞として用いられる過去分詞

次にここでは動詞から派生する形容詞的用法の過去分詞の形態とその結合価について分析を行う。すべての過去分詞の形態が、分詞の意味を持つとは限らない、言い換えれば、

同音異義語が見られる場合がある。これらのドイツ語の過去分詞は、動詞と形容詞の両方の意味を併せ持つ。出来事の完了・状態受動のほか、形容詞または付加語的用法として用いられる。(Die Tur ist aufgeschlossen そのドアは解放されている。/ Er ist aufgeschlossen auf unsere Kultur. 彼は私たちの文化に興味を持っている。) 過去分詞形形容詞は、一つまたは二つの格を支配するものがある。

- 1) Sandy war nicht wirklich davon überzeugt, einen großen Schatz in dem alten Gemäuer entdecken zu können. (GR1/TL1.06825 Balden, Barbara: Nur ein einfaches Mädchen, [Trivialroman]. - Hamburg, 1990 [S. 58])

例1)<sup>25)</sup>の過去分詞 überzeugt は、状態受動ではなく今日では形容詞として扱われている。意味にも微妙な差があり、動詞は「説得する、納得させる」と解釈されるが、過去分詞形形容詞は「確信のある、信念を持った」と訳される。どちらも von によって導かれる前置詞格目的語を支配する。否定の不変化詞 nicht は、副詞的用法の形容詞 wirklich と密接に結びついている。この nicht は文全体にかかる否定の不変化詞ではないので、動詞に属するものではない。否定の不変化詞と wirklich は統一された要素と考えられ、形容詞核 überzeugt のグループに属する任意の添加語となる。

関連語の davon は後続する不定詞句をあらかじめ指す語であり、これは意味的に省略可能である。後続の不定詞句は義務的な付加語文とみなされ、文枝核(本動詞: entdecken、助動詞: können) と4格目的語(einen großen Schatz in dem alten Gemäuer) から成る。

- 2) die Anstalt des Fürsten Esterhazy jedoch übertraf alle die übrigen. Unsere kleine Gesellschaft war von der Erfindung und Ausführung entzückt, und wir wollten eben das einzelne recht genießen [...] (GOE/AGD.00000 Goethe: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit [I-III], (Geschr. 1809-1813), In: Goethes Werke, Bd. 9. - München, 1982 [S. 208])
- 3) Da kam der König herbei und sah die schöne Königstochter mit dem goldenen Stern auf der Stirne, und war so entzückt über ihre Schönheit, daß er ihr zurief, ob sie seine Gemahlin werden wollte. (GRI/KHM.00009 Die zwölf Brüder, (Erstv. 1819), In: Kinder- und Hausmärchen, gesammelt von Jacob und Wilhelm Grimm. - München, 1978 [S. 83])

例2)と例3)の entzücken という動詞は、状態受動と形容詞的用法の両方の場合において von で導かれる前置詞格目的語が付随する。これらの例文二つがどちらの用法で使用されているのかを見極めることは非常に困難だが、ここでも意味論を基に考察を行うべきである。例2)は本動詞の過去分詞形で状態受動として使われている。例2)の entzücken はあるものを見て大いに喜んだり、大変すばらしいと思うという意味になる。それゆえにこ



ここでは文中の出来事を引き起こす動作主が必要となる。Unsere kleine Gesellschaft war von der Erfindung und Ausführung **entzückt**. → Die Erfindung und Ausführung **entzückte** unsere kleine Gesellschaft. 受動態の結合価を数えるとき、能動態に書きなおす必要がある。前置詞句の von der Erfindung und Ausführung は起動の意味素性を持つ主語になり、名詞句の unsere kleine Gesellschaft は4格目的語の場所にあてはめられる。このように、動詞の結合価は二価となる。

例3) の分詞の意味は、うっとりした目つきで見とれるや、あまりの美しさに夢中になって他のものが目に入らないという意味合いが強いために、ある継続する状態を表している。それゆえに実際に形容詞そのものとして扱われている。entzückt の補足パートナーが本来ならば前置詞の von によって導かれるはずであるが、über によって導かれている。これはうっとりで見とれている状態の原因をあらわすゆえに、形容詞グループに属する付加語と見なす。義務的付加語は über ihre Schönheit だけではなく、もう一つこの形容詞に依存している付加語がある。度数詞の so がそれにあたり、形容詞を修飾する役割と、後続の dass 以下の結果文を指し示す役割を担う。この結果文は、主文の内容または様態を詳しく特徴づける。例3) も同じく二価の形容詞となる。この結果文はまたさらに細かく文肢核と文肢に分けることができる。

結合価の中心となる語が支配する補足成分には義務的、任意的要素があると前に述べたが、その二つを区別する方法は今までに、意味論や語用論よりも統語論に頼る傾向があった。過去分詞の形容詞的用法と動詞が支配する補足語の種類と数は同じときもあれば、違うときもある。形容詞の場合、はっきりした区別は動詞ほどあるわけではなく、また過去におけるこれまでの論理的な方式や独自の研究ではまだ義務的成分と任意的成分の境界線が明白でもない。現在の研究の時点では、統語論だけでは解決できないという問題点を残しているため、これらは今後の課題となる。

## 注

- 1) 副詞は形容詞の部類に数えられるが、形容詞とは反対に語形変化が可能ではない。事物(名詞)ではなく、進行(動詞)と性質(形容詞)を特徴づける。Admoni, Wladimir (1968): Der deutsche Sprachbau. München, S. 198.
- 2) Helbig, Gerhard (1967): Valenz und Tiefenstruktur. In: Deutsch als Fremdsprache, 4, S. 159-69, bes. S. 159f.
- 3) Sommerfeldt, Karl-Ernst (1981): Zu den Kontextsemen deutscher Adjektive. In: Werner Mühlner (Hrsg.): Semantik, Valenz und Sprachkonfrontation des Russischen mit dem Deutschen. Leipzig, S. 15-32, bes. S. 15.
- 4) Korhonen, Jarmo (1981): Zum Verhältnis von verbaler und nominaler Valenz. In: Neuphilologische Mitteilungen, 82, S. 36-59, bes. S. 46ff.
- 5) Flämig, Walter (1971): Valenztheorie und Schulgrammatik. In: Gerhard Helbig (Hrsg.): Beiträge zur Valenztheorie. Halle, S. 105-21, bes. S. 106.

- 6) Bußmann, Hadmund (Hrsg.) (2008): Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart, S. 487f.
- 7) Sommerfeldt, Karl-Ernst/ Schreiber, Herbert (1977): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive. Leipzig, S. 24.
- 8) 「余計な文成分の除去は話し手によって任意的に操作される。話し手はそのつどのコミュニケーション場面の前提条件によってある事を実行するかしないかを選択できるということが大事である〔中略〕実際のコミュニケーション場面では前後の脈絡が欠落している文は決して存在しないということが当然ながら問題である。」(Nikula, Henrik (1999): Semantische oder Pragmatische Valenz. In: Neuphilologische Mitteilungen, 100, S. 389-402, bes. S. 390f.) 「核文 (das syntaktische Minimum) は必要最小限の統語的根本要素含むが、実際には構造的必須という意味ではなく、情報伝達に必須の根本要素が重要である。」(Helbig, Gerhard (1971a): Theoretische und praktische Aspekte eines Valenzmodells. In: Gerhard Helbig (Hrsg.): Beiträge zur Valenztheorie. Halle, S. 31-49, bes. S. 34.)
- 9) Helbig, Gerhard (1971b), a. a. O., S. 276.
- 10) Nikula, Henrik, a. a. O., S. 393.
- 11) Helbig, Gerhard (1971b), a. a. O., S. 280.
- 12) Helbig, Gerhard (1971a), a. a. O., S. 38.
- 13) Günther, Drosdowski (Hrsg.) (1996): Duden. Deutsches Universalwörterbuch A-Z. Mannheim/Leipzig/usw, S. 356, s. v. „donnern 3“.
- 14) Ebd, s. v. „donnern 5“.
- 15) Nikula, Henrik, a. a. O., S. 393f.
- 16) Bondzio, Wilhelm (1971), a. a. O., S. 90.
- 17) Korhonen, Jarmo, a. a. O., S. 41.
- 18) Bondzio, Wilhelm (1971): Valenz, Bedeutung und Satzmodelle. In: Gerhard Helbig: Beiträge zur Valenztheorie. Halle, S. 85-103, bes. S. 89.
- 19) Helbig, Gerhard (1971b), a. a. O., S. 270f.
- 20) Sommerfeldt, Karl-Ernst (1981), a. a. O., S. 23.
- 21) Sommerfeldt, Karl-Ernst (1977), a. a. O., S. 11.
- 22) Bondzio, Wilhelm (1971), a. a. O., S. 11.
- 23) 幾つかの形容詞の場合には、主語と義務的付加語の位置を交換することができる。 ‚sicher‘ には ‚gewiss‘ や ‚zuverlässig‘ などの意味があり、この形容詞は2格目的語か3格目的語のいずれかを要求する。その義務的付加語の格は形容詞の文法項に即して決められる。Sommerfeldt, Karl-Ernst (1977), a. a. O., S. 33.
- 1) Hum mit Genitivadjunkt (Abstr):  
Attribut: der (sich) seines Erfolges  
sichere Sportler  
Prädikativ: Er ist (sich) seines Erfolges  
sicher.
- 2) - Anim / Abstr mit Dativadjunkt (Hum):  
Attribut: der dem Sportler sichere Erfolg  
Prädikativ: Der Erfolg ist dem Sportler  
sicher.

この位置交換における文法的規則の可能性については、今後の研究課題とした  
い。

24) Sommerfeldt, Karl-Ernst (1977), a. a. O., S. 197.

25) 1 から 3 の全ての例文は、Cosmas 2 から引用した。

Corpus search, management and analysis system. Institut für Deutsche Sprache  
(Mannheim).

<[http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/.](http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/)>

## Variieren und Analogie der verbalen und adjektivischen Valenz

Satomi BABASAKI

Eine Sprache ist ein Zeichensystem, das verschiedenartige sprachliche Zeichen enthält. Die Begriffszeichen haben einen direkten Wirklichkeitsbezug, deshalb erfolgt die Klassifizierung der Wortarten nach uneinheitlichen – semantischen, morphologischen und syntaktischen – Kriterien<sup>1)</sup>. Nur die Begriffszeichen haben eine Inhaltsseite, d.h. die einzelnen Lexeme dieser Klasse besitzen sowohl eine syntaktische Funktion als auch lexikalische Bedeutungen. Sprache ist im Prinzip die Manifestation der sozialen Tätigkeit, miteinander zu kommunizieren, d.h. das durch Kommunikation bewirkte Ergebnis basiert auf der Fähigkeit, das Sprachsystem zu verwenden bzw. die Sprachproduktion und die Sprachrezeption zu beherrschen.

Wenn sprachliche Einheiten sich verbinden, fungiert das Verb als strukturelles Zentrum des Satzes. Diese syntaktischen Konstruktionen werden „einmal durch grammatische Mittel hergestellt, zum anderen bringen die Lexeme auf Grund ihrer lexikalischen Semantik selbst bestimmte Voraussetzungen für die Herstellung solcher Beziehung mit“<sup>2)</sup>.

Der Valenzträger verlangt bestimmte Kontextpartner mit bestimmten Bedeutungsmerkmalen, d.h. seine Kombinierbarkeit ist teilweise stark eingeschränkt. Die Valenz der Begriffszeichen eröffnet Leerstellen, deren Belegbarkeit durch bestimmte lexikalische Eigenschaften des Valenzträgers gesteuert wird. Diese Bedingungen werden bei übertragenem bzw. phraseologischem Gebrauch nicht erfüllt; manche Verben enthalten mehrere Bedeutungen, die konkret und metaphorisch sein können.

Die Ergänzungen bei relationalen bzw. mehrwertigen Adjektiven sind sowohl semantisch als auch syntaktisch von den Valenzträgern determiniert. Es ist zuerst nötig, auf lexikalisch-semantischer Ebene von Wortgruppen zu sprechen<sup>3)</sup>. Diese syntaktischen Einheiten bauen auf Komponenten bzw. Dingen in der Realität auf, die zueinander in Beziehung stehen. Die Valenz beruht darüber hinaus noch auf subjektiven Komponenten, die vom Sprecher abhängig sind. Adjektive weisen zum verbalen Valenzträger einen grundlegenden Unterschied auf: Verbalvalenz konstituiert Sätze, während Nomina zur Bildung von Satzgliedern beitragen. Das Verb verlangt Satzglieder bzw. Ergänzungen als Valenzpartner, das Nomen Satzgliedeile. Adjektivische Valenz weist auch Parallelen zur Verbalvalenz auf. Manche adjektivischen Valenzträger haben mehrere Bedeutungen, und wegen ihrer unterschiedlichen Bedeutung wird die Änderung der Aktanten sowohl in quantitativer als auch qualitativer Hinsicht bewirkt.

---

1) Helbig, Gerhard(1968): Zum Problem der Wortarten in einer deutschen Grammatik für Ausländer. In: Deutsch als Fremdsprache, 5, S. 1-18, bes. S.1.

2) Sommerfeldt, Karl-Ernst(1981): Zu den Kontextsemen deutscher Adjektive. In: Werner Mühlner(Hrsg.): Semantik, Valenz und Sprachkonfrontation des Russischen mit dem Deutschen. Leipzig, S.15-32, bes. S.15.

3) Sommerfeldt, Karl-Ernst(1981),a.a.O., S.23.